

# 観光バス、神戸の復興へ向けて活躍する

神戸観光バス株式会社

## 1 地震発生時の状況

当時、運行管理者1名、ドライバーら7名が宿直していた。地震の揺れは相当激しく、観光バスの駐車場の路面に亀裂がはいった。社員の一人は午前6時05分、加古川の上司に対して、建物が倒壊していないこと、駐車場に亀裂が入ったことなどの被災状況を公衆電話で報告した。報告を受けた上司は社員の安全が第一と考え、「余震の恐れがあるので、建物から離れた観光バスの中に全員避難しておくように。」と指示をした。指示を受けた社員は、全員指示通りに屋外ガレージの観光バスに避難した。当日の17日はこの状態で一睡もせず夜を明かすことになった。その夜、近くの水消防署から救援物資の差し入れがあり、有り難かった。

新神戸に住んでいた女性ガイド指導主任は、すぐに会社に連絡を取ったが通じなかったため、もしかしたら建物が倒壊しているのではないかと心配になり、徒歩で自宅を出発した。1時間30分ほどかかり、液状化したポートアイランドを歩いて午前9時30分に到着した。会社の無事を確認した主任は胸をなでおろした。会社では約80名の社員の安否を確認するのに3日ほどかかった。

## 2 観光バスの運行状況

前日の16日から愛知県の知多半島に観光に行っていた1台の観光バスは、神戸での地震を知って帰神しようとしていた。当日17日の午後10時に会社に「現在地、大阪市天満付近」との連絡が入ったが、その後連絡が取れなくなり、バスは観光客を乗せたまま夜を明かすことになった。事務所とはバス無線が通じなかったため、事務所の役員が再度山に車で向かい、そこで再度連絡を取ろうとしたが不可能であった。18日昼頃にやっと連絡が取れ無事に帰神することができた。

最初に復興活動を実施したのは地震後4日目の1月21日である。ガレージの亀裂を応急的に補修し、災害復興部隊を乗せてホテルと復興現場を往復した。比較的業務再開が早かったのは、市内の観光バス会社の中では被害が少なかったために早い段階で要請があったからである。その後、自衛隊、看護婦さんらの医療スタッフ、全国の自治体職員らを宿舎に搬送した。

## 3 消防活動拠点の提供

地震発生翌18日午後3時頃、水消防署から「消防庁舎が損壊を受けたので、事務所の一部を消防署連絡場所として使用させて欲しい。」との依頼を受けたので快諾し、1階北側の応接室を連絡場所として提供した。また、消防職員の仮眠場所として観光バスを2台用意し、一晩中エンジンをかけたままにして車内の暖房を確保した。